
ちょっとネクラ・クロニクル

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつとネクラ・クロニクル

〔二十一〕

N
6
4
5
8
Z

【作者名】

青い絵
八代

[おひすじ]

世界の言葉

これは、ミツショソ。俺たちは、パラレルワールドを救い、正しい世界線へと導く。そう、俺飯田明治は、特異点なのだ。

その日は、雨だった。傘を差して、コンビニの帰りだった。彼女は、突如隕石として落ちてきた。可憐で、切なそうな顔。そして、くりくりした目。地面は粉々になっていたが、理想だった。

その少女の名は、アイス。それは、運命のように思えた。

僕の名前は、飯田明治。数学で、全国一位の男だ。実は、この間も数学オリンピックに出て一位。しかし、それでも僕は根暗だけに、落ち込む。

完璧な解答ではなかつた。反省。

まあ、すぐに一応切り替えるんだけど。気持ちがどんより。この町、有瀬町もこの間の隕石事件で大騒ぎになつていたが、ダブル落ち着いてきた。

実は、その時落ちてきた少女アイスは、僕の家にいる。同じテーブルに今も向かい合つて座つている。トランプをしているのだ。

得意な神経衰弱でいじめているのだが、いじめられているのにもかかわらず楽しそうだ。

僕には、真似できない芸当だ。

「おい、貴様。本当に宇宙人なんだろうな！」本題に入った。

「うん、てへつ」

「てへつ、じゃねえよ」

「そうだねー。オリオン座から着たんだよ。私は、選ばれし者を求めていたの」

「選ばし者？」

「世界を救うことができる人間を探しているのよーん」

「まさか、俺か？」
考え込む、アイス。

どうやら、答えたくないらしい。

仕方ないので、ジュークを飲みに、一階へ。階段をとんとんと降りていく。その中で、いろいろ思ったのだが、世界を救うって今時そんなことできる人間居るのか。正直、何かのエキスパートじゃないとムリだろ。

一階に戻ると、アイスは、妙な音がする携帯を片手に交渉していた。

話は、言語が違いすぎてよく分からぬ。本当に宇宙人なんだな。「そつすか。そつすか」分かりやすい言葉をたまに呟つ。「ほいほい」

会話しているのだろうか。

まさか、擬音だけで「ミュニケーション。
宇宙人の発想が分からぬ」。

「なあ、電話終わつたようだな」

「うん、てへつ。実は、君が選ばれし者なんだなー、そ・れ・が

ウソだろ。

俺は、人間の中でも「ゴリやほ」に近い底辺なはずだ。それに、俺に世界を救うなんて一万光年くらい速い。

つてことは、一生ありえない。

「君の目が選ばし者の証しゃ。その闘志にあふれるめ、かつこいいよー。えへへ」

「ふつ、宇宙人の言つことなんて聞には受けないぜ。これでも、常識は有る」

あー、なんか悲しい。

こんな宇宙人にまで、バカにされるとは。

「おいおいおい、あんた、どこまで引っ込み思案？」

「ついに、本性を表したな。宇宙人め」意味不明な言いがかりである。

「ルールを説明しまーす」スルーしやがった。

俺は、絶望で一杯になつて、部屋の隅っこへ。

その時、突然異次元のような、不思議な空間になつた。

アイスの魔力によるものだ。

「な、なな、な、ななんだ」

「あなたは、ゲーム感覚でよろしくって。パラレルワールドを救う、ルール？ 異世界には三日間しか居られない。ルール？ 1を守れなかつたら死ぬ」

「あつさりしてるな。そんなルールくらい、フェルマーの最終定理に比べたら、ゴミだな」

「なんでも、ゴミ扱いしないで…！ そんなことよりも、レッジゴー。まあ、ゴーってやりなさい」

渋々、俺も手を上げて、ゴーとした。

「ゴー？」

……。

突然、元通りの、俺の部屋になつた。

しかし、話を聞く限り、ここはパラレルワールドらしい。気にな

つたので、外ものぞいてみると、とんでもないものが見えた。

空に車が飛んでいるのである。

まさか、科学が異常に発達した世界？

ありえない、これは夢だ。

夢だと思おう。

「こらあ、パラレルワールドオブ科学によつて」
間の抜けた声で、アイスはそう言つた。

もう駄目だ。俺はここに死ぬんだ。

いじける、俺。

「そうだ、マニュアルがあるよ

「ホントか？」

「ヒントだけだけどー」

「無いよりはいい！」

それを、俺はじつくりと冷静に読んでいった。

『この世界は、科学が発展しているよ。君がしなくてはいけないのが、この町に住んでいる一人の男の発見を邪魔して欲しいんだ。その男は、あるとんでもない発明をしてしまうんだけど。それを止められたら、『豪美に世界一おいしいカレーをプレゼントします。』言つておきますが、今まで誰も手に入れられなかつた秘宝と呼ばれるカレーだよ。もし食べれなかつた絶対に後悔するので』』注意を。このゲームはドロップアウトもできるけど、ペナルティーが与えられるから気をつけてね』

まさか、こんな面倒なことを押し付ける宇宙人が居たとは。大体、

カレーなんてイラねーよ。

あー、もう。

しかたねー。

「この町の人で科学者の人を、検索するから図書館に行こう。とりあえず…」

「おっ、さすが、フェルマーが分かる男」

「ほつとけ」

しばらく、歩いて、坂道を上がりていき、ふたたび歩いて、右に曲がって左に曲がったところに、図書館があった。

有瀬町民図書館である。

「ふあああ」俺は、いろいろな文献を一応用意し、ネット検索にまづ取り組んだ。

すると、あつさりこの町の科学者でかなり有力な人物が一人だけ見つかった。

名前は、平清盛だ。

どこかで、見たような名前だ。確か歴史の…。

まあいいか。

「ねーねー、この人凄いんだね。運命論なんてロマンチックなものを探してゐる」

「そうだな、運命が分かれれば、怖いもんなんだ。行くぞ、宇宙人アイス」

そして、再び時間が流れる。

翌日、地図や知人から情報で、居場所がやつと分かつた。

町外れのある一軒家に、彼は居るらしい。

「ふうー。ついに、きたな。三日つてことは、時間には間に合つている。アイス、それにしてもこんな豪邸うらやましくないか？」

「うーん、私はお城に住んでたよ

「共感してくれよ」
少し、絶望。

その後、インターベルを押した。だが、ここで、インターベルを押しても出でくれるかが非常に不安だった。

それでも、そうするしかなかつた。

何時まで経つても、ドアが開かない。完全に絶望しかけていると。「すみません」ガチャ、ヒドアが開いた。「いやー、いろいろ考え事をしていたものだから」

割と、気さくな青年がそこにはいた。

名前は、平清盛。年齢は推定二十五。

「あのー、あなたの発明について調べてみたら感動しちゃつて、少しいろいろと話がしたくなつたんですよ。忙しいでしようが、いいですか？」

俺は、低のいいウソをつく。

まあ、調べたのは事実。

「うん、いいよ。あがつてくれ

清盛さんは、ソファーに座らせてくれた。
そこで、研究資料を広げて見せててくれた。
しばらく、興味本位で話を聴いていると。

俺は、ふと可笑しいことに気づいた。

この人の家の家具、ずいぶんと現代様式じゃない。ちょっと中世っぽい。

なのに、新しい。

この人…。

そういえば、運命論の研究。

それに、してはいけない発明。

可能性は一つしかない。

「あの……」俺は邪道だが話し合いで解決する」とした。
「清盛さん……、タイムマシンの研究していませんか？」

えつ?

「正直にお願いします」

「ああ……、ばれたか。そりやそうだ、過去から物を転送することには成功して、ほぼシステムは完成しているんだからな。凄いだろ？」

「あなたは……、その発明で世界がどう変わってしまうか考えていますか。大変なことになります、様々な情報機関がそのタイムマシンを狙うでしょう。それこそ、核爆弾のような自体にもなりかねません。世界が終わってしまうことが無いようにしたい。開発を中止してください」

「だが……、自分のすべてなんだ……」

「分かります。俺も、変えたい過去くらいありますから。でも……
変えても結局意味なんて無い。お分かりでしょ。あなたを俺は……
信じようとします。あなたは、できる限り最善を尽くして欲しい。
それが、今の俺に言えることであり、できる」とです。

「世界、
変わりました

- - - - -

当然だ。

これは、俺が一睡もせず必死に考えて、出した答えだから。
そして、世界は突然、姿を変え、俺の部屋になつた。

「ふー、大変だつた。くたくただ」
そして、世界は突然、姿を変え、俺の部屋になつた。

「よくやりましたね。あなたは優秀です」

「QED証明終了って感じかな」

田の前には、おいしそうな香りのする、見た田も豪勢な究極の力量
レーが存在していた。

ライスもセット。

それを、食べたとき、俺はふと……何かを達成することの喜びを
学んだのだつた。

『ギブアンドテイク』

それは、勝者の甘酒。

俺たちの物語は、一つにことじめらない。未来は、無限に存在する。
だが、それを俺はまだ知らない。

(後書き)

隕石が降つてきたら、もしかしたら中に宇宙人が居るかも。そして、あなたを選ばれし者と認めてくれるでしょう。
そして、あなたはパラレルワールドへ行き、世界を知りゆく旅人となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6458z/>

ちょっとネクラ・クロニクル

2011年12月21日20時52分発行